

2-4. 香取神宮信仰と式年神幸祭に見る歴史的風致

(1) はじめに

香取神宮は古来より下総国一宮として、広く崇敬を集めてきた古社である。市内を西から東へ流れる利根川の南側、香取地区にあり、「亀甲山」と呼ばれる台地上に鎮座している。その台地を中心に境内地が広がっている。主祭神は経津主神（伊波比主命）で、相殿には比売神・天兒屋根命・武甕槌神を祀る。経津主神は、鹿島神宮の武甕槌神とともに武徳の神と言われる。



香取神宮境内

香取神宮では、御田植祭や神幸祭など6件の大祭や元始祭や大饗祭など10件の中祭など、各種祭礼が年間通して執行されている。普段から多くの観光客の参拝で賑わう香取神宮ではあるが、これらの大祭などには、さらに多くの見物客が集まり、境内は賑わいを見せる。また、12年に一度、午年に行われる式年神幸祭では、二日間をかけて、香取神宮から佐原まで大行列を組み、一大絵巻を繰り広げる。この式年神幸祭はかつて「御船遊」とも呼ばれた神幸行列であった。そこには、多くの氏子地区の住民や神楽などの伝統芸能を伝承する保存会などが供奉し、当地域における香取神宮信仰の大きさを物語るものとなる。

(2) 香取神宮について

①香取神宮の歴史

社伝によれば神武天皇18年創始と伝えられる。ヤマト政権の東国支配の拠点として祀られた社を創始とするという説が一般的である。現在の利根川の北側には、古代においては「香取の海」と称する入り江が発達し、外海ともつながる重要な場所であったとされ、この水域を挟んで対峙する香取神宮と鹿島神宮はその掌握のために置かれたと考えられている。

文献上では、8世紀中頃に成立した『常陸国風土記』行方郡の条に「北有香取神子之社」とある。この社は香取神宮の分祀（現茨城県行方市の香取社）と解釈されるため、これ以前に香取神宮は創立し、周辺地域に勢力が及んでいたと推定される。

『日本書紀』に経津主神（^{ふつぬしのかみ}伊波比主命^{いはひぬしのみこと}）は「此神今在于東国楫取之地也」とある。楫取とは船の航行を司るもので、香取の名はこの楫取が転じたものと解釈されている。香取の海には多くの津が散在し、そこには「海夫」と呼ばれる漁民が存在した。海夫たちは、古くから香取神宮に魚介類を神饌^{しんせん}として貢進し、香取神宮を航海の神として信仰していた。

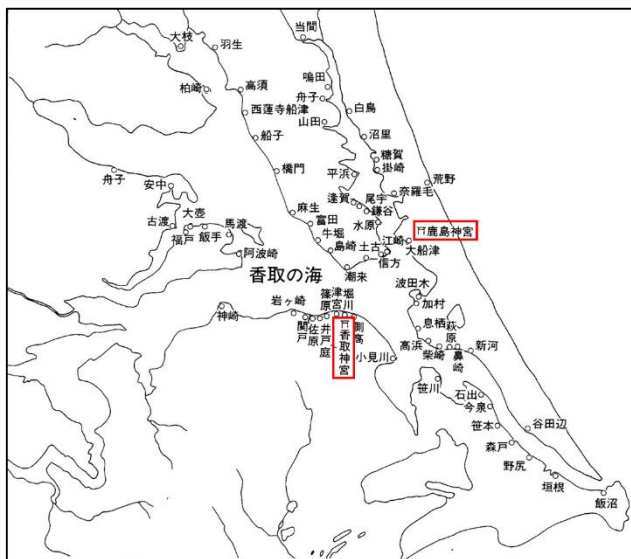
奈良時代には、中央で権力を占めていた藤原氏が8世紀後半に香取・鹿島の両神と枚岡社の二神を勧請し、奈良の春日大社を創建した。

社領は神領とも呼ばれており、『和名類聚抄』（承平年間〈931～938〉に成立）によると、10世紀の香取郡には、香取・大槻・小川・健田・沢草・磯田の6郷が認められる。

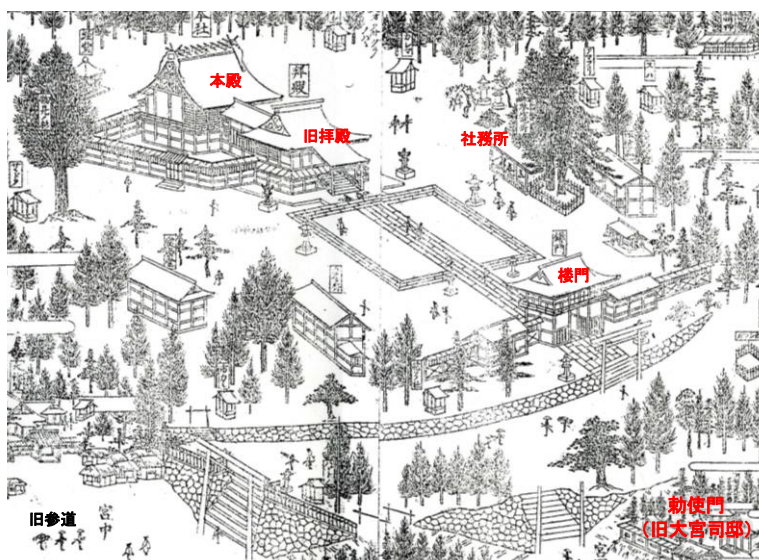
中世には、千葉一族である在地領主の発展など様々な要因によって、神郡である香取郡の一円的神領の形成に失敗し、その社領は、下総・常陸両国に点在する特殊な社領を除くと、殆ど旧香取・大槻両郷の範囲にとどまったとされる。

（福田豊彦「封建的領主制形成の一過程—下総国香取社の場合—」参照）。

近世に入ると徳川家康の関東入部により、香取神宮周辺は家康の家臣である鳥居元忠領となった。天正19年（1591）2月には香取村を含む地域の検地を実施し、朱印地として1,000石が寄進され、以後、近世の社領に変化はない。



香取の海と津の分布（千葉県立中央博物館『展示図録 香取の海』より、一部加筆）



香取神宮境内の図（『香取参詣記』文政11年〈1828〉、一部加筆）

②旧参道と神宮寺

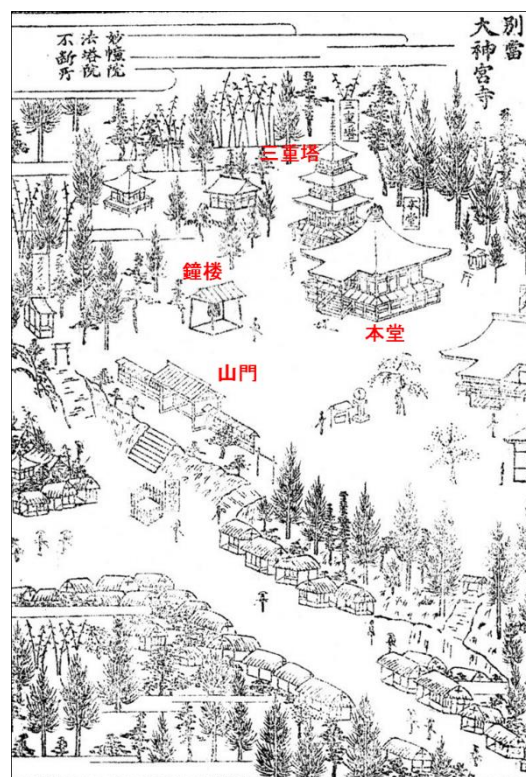
県道に面した駐車場から総門へつながる現在の参道は、大正期に新設されたもので、元々は楼門から西側へ向かう道が表参道であった。古くは利根川沿いの津宮河岸^{つのみやがし}が表参道の起点であり、かつては船宿も並んでいた。現在も木造の大鳥居が建てられており、12年に一度の式年神幸祭ではこの津宮河岸から御座船^{ござぶね}が佐原に向け発する。



旧参道の風景

旧参道の神宮西方のつき当たり付近には、かつて神宮寺が所在していた。香取神宮の別当寺、「金剛宝寺」^{こんごうほうじ}ともいわれたが、明治初期の神仏分離により取り壊されてしまった。境内には山門、本堂、三重塔、鐘楼などがあったとされ、文政11年(1828)『香取参詣記』にもそれらが描かれている。

神宮寺跡には祖霊社^{それいしゃ}が建立され、境内には元禄13年(1700)銘の手水鉢石が残る。本尊であった木造十一面観音像^{じゅうもんじ}は莊厳寺(佐原イ)に移され、その後重要文化財となり、また、至徳3年(1386)銘の梵鐘が神奈川県藤沢市羽鳥の御霊神社境内に現存し、同市の指定文化財となっている。



神宮寺の図(『香取参詣記』文政11年
(1828)、一部加筆)

③摂社・末社

香取神宮の境内外には、古くから多くの関連する摂社・末社があり、『香取神宮小史』には別表のような摂社・末社が挙げられている。

この他に、旧摂社・末社として、神崎神社(香取郡神崎町)^{こうざき}、高房神社(多田山田)^{たかふさ}、切手神社(大根)^{きりて}、東大社(香取郡東庄町)^{とうだいしゃ}、木内神社(木内)^{きのうち}が挙げられている。

	名称	地区	備考
摂社	側高神社	大倉	香取神宮第一摂社、本殿は県指定文化財
	返田神社	返田	本殿は市指定文化財
	大戸神社	大戸	所蔵の羅龍王面、和鏡などは県指定文化財
	忍男(おしお)神社	津宮	津宮河岸近くにある、東ノ宮とも
	膽男(まもりお)神社	津宮	津宮河岸近くにある、西ノ宮とも
	又見神社	香取又見	本殿脇の又見古墳は市指定史跡
	奥宮	香取宮中	
	鹿島新宮社	境内	
	匠瑳神社	境内	
境内末社	天降神社・諏訪神社・六所神社・花藺神社・馬場殿神社・櫻大刀自神社・市神社		
境外末社	押手神社・姥山神社・佐山神社・狐坐山神社・王子神社・沖宮・龍田神社・塙(おしで)神社・裂々神社・日神社・月神社・大山祇神社・三島神社・護国神社		

香取神宮の摂社・末社

④遷宮・造替と式年神幸祭

香取神宮は、『日本後紀』弘仁3年(812)6月5日の条に「…住吉・香取・鹿島三神社、隔廿箇年、一皆改作…」とあるように、九世紀初頭には住吉大社、鹿島神宮とともに20年に一度の遷宮・造替が制度化されていた。

また『延喜式』臨時祭にも「…凡諸国神社、随破修理、但摂津国住吉・下総国香取・常陸国鹿島等神社正殿、廿年一度改造、其料使用神税、如無神税、即充正税…」とあるように、20年に一度の正殿の造替と、その経費に神税もしくは正税を充てるように、とある。

ただし、この遷宮が正しく実行されていたかどうか不明であるが、『新修香取神宮小史』では、古文書などに次の通りに見えるとされている。

遷宮年	西暦	遷宮年	西暦	遷宮年	西暦
治承元年	1177	正応6年	1293	文明15年	1483
建久8年	1197	元徳2年	1330	天文年中	1532~1555
嘉禄3年	1227	貞和6年	1367	元亀2年	1571
宝治3年	1249	永和年中	1375~1379	慶長12年	1607
文永8年	1271	応永年中	1394~1428	元禄13年	1700

『新修 香取神宮小史』(平成7年4月14日、香取神宮)より

香取神宮の式年遷宮一覧

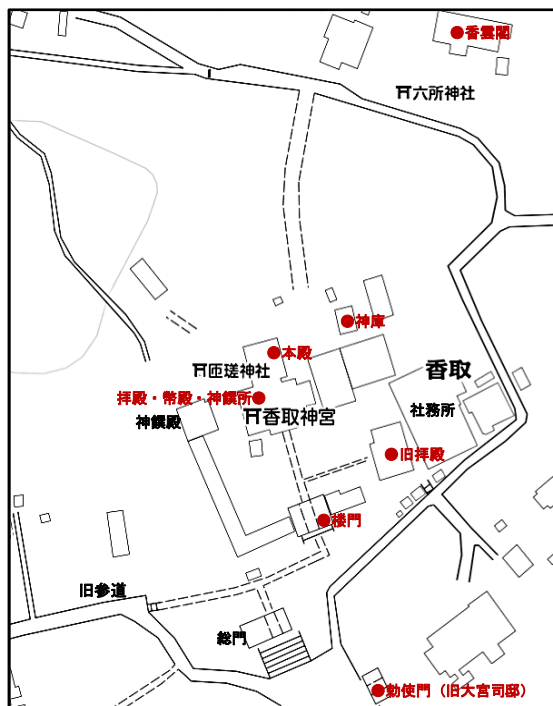
近世には徳川幕府により、慶長12年(1607)・元禄13年(1700)の2回の^{せんぐう}遷宮・^{ぞうたい}造替が行われている。この元禄13年の造営により建てられた本殿、楼門、旧拝殿(神楽殿)が現在も残されているものである。

なお、香取神宮で現在12年に一度行われる式年神幸祭は、少なくとも、江戸時代には途切れていたものを、明治8年(1875)に再興したものであるが、かつては式年遷宮大祭として、20年に一度の遷宮・造替に伴って行われたものである。

（３）香取神宮に関連する建造物

①香取神宮境内の建造物

香取神宮の境内は、亀甲山の丘陵地を中心に広い範囲を有し、そのうち約 44,000 m²が「香取神宮の森」として県指定の天然記念物となっている。その境内には、重要文化財の指定を受けている香取神宮本殿・楼門を始めとする多くの歴史的建造物が配置されている。



主な境内建造物の位置図

◆香取神宮 本殿 ＜重要文化財＞

年代：元禄 13 年（1700）、棟札が残る

規模・特徴：三間社流造に後^{うしろ}庇^{ひさし}を加えた両流造の形式で、正面と側面に廻縁を設ける。屋根はかつて柿^{こけら}葺^{ぶき}であったが、昭和 15 年（1940）に檜皮葺に改めた。規模は、正面 28.3 尺、側面は 34.03 尺。黒漆塗り、墓股や虹梁・組物には極彩色の装飾を施す。墓股等は古風で前代の慶長期の様式が伝わるとみられる。



本殿



本殿（昭和 11～15 年）

◆香取神宮 楼門 <重要文化財>

年代：元禄 13 年（1700）、棟札が残る

規模・特徴：2 階建、正面 3 間、側面 2 間、扉がついて通行できる出入り口が一つの、いわゆる三間一戸楼門。入母屋造、銅板葺（元は^{とちがき}枋葺）、丹塗り、上層と下層の間に高欄付きの廻縁を付ける。正面二階の社号額「香取神宮」は東郷平八郎^{とうごうへいはちろう}の書によるものである。



楼門



楼門（大正 10 年）

◆香取神宮 ^{はいでん} 拝殿・^{へいでん} 幣殿・^{しんせんじょ} 神饌所 <国の登録有形文化財>

年代：昭和 15 年（1940）

規模・特徴：（拝殿）桁行 5 間、梁間 3 間、入母屋造、檜皮葺、正面に千鳥破風と軒唐破風、軸部は黒漆塗りで組物、簷股などは極彩色の装飾が施されている。

（幣殿）桁行 1 間、梁間 1 間、両下造、檜皮葺、南面は拝殿に接続。

（神饌所）桁行 2 間、梁間 2 間、切妻造、檜皮葺、東面は拝殿に接続。



拝殿・幣殿・神饌所



拝殿・幣殿・神饌所（昭和 15 年）

◆旧拝殿（神楽殿） ＜県指定文化財＞

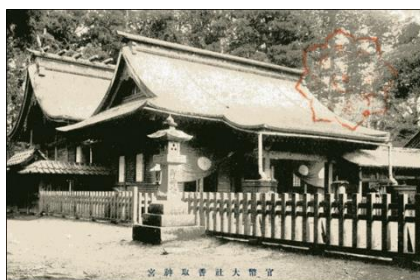
年代：元禄 13 年（1700）

規模・特徴：桁行 5 間、梁間 3 間、入母屋造、向拝 1 間、銅板葺（元は^{とち}栴葺）

元禄 13 年に本殿、幣殿とともに造営された。昭和 13 年（1938）現拝殿の新築に際して南東へ移動し、さらに昭和 59 年（1984）前方へ 1.5m 移動、その際に向拝柱礎石から元禄 13 年の刻銘が発見されている。現在は神楽殿として使用されている。



旧拝殿



移動前の拝殿・本殿（大正期）

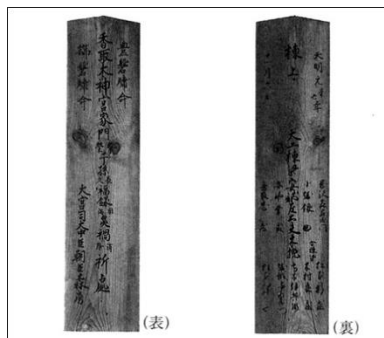
◆香取神宮^{ちやくしもん}勅使門 ＜県指定文化財＞

年代：天明元年（1781）

規模・特徴：桁行 3 間、梁間 2 間、切妻造、茅葺、両袖塀付属。間口 21 尺（6.4 m）の大規模な門。大宮司家の表門として建立されたもので、勅使門とも呼ばれている。天明元年（1781）の棟札が残る。大宮司家の屋敷は昭和 23 年（1948）に焼失し、その跡地に神徳館が建てられている。



香取神宮勅使門



香取神宮勅使門 天明元年棟札

◆神庫 ＜市指定文化財＞

年代：明治 42 年（1909）

規模・特徴：桁行・梁間とも 3 間、入母屋造、棧瓦葺。規模は 18.2 尺（5.5m）四方の中規模の本格的な校倉造。正面に縁とその右側に階段を設けているが、縁は後補で、当初は板扉の正面に階段が設けられていた。



神庫



建築当初の神庫

◆^{こううんかく}香雲閣 <国の登録有形文化財>

年代：明治 33 年（1900）一部を除き完成
 規模・特徴：木造 2 階建、寄棟造、棧瓦葺、桁行 72.75 尺（22.0m）、梁間 33 尺（10.0m）、南面玄関付属、唐破風造、銅板葺。和風建築で、集会や直会などに使用されてきた。明治 44 年（1911）には皇太子殿下（大正天皇）の御参拝時に休憩所となっている。香取神宮の「香雲閣ニ関スル書類」（大正 14 年頃）によると、明治 30 年（1897）年に起工し、明治 33 年（1900）6 月に事情により 1 階内部造作を残して中止し、後に大正 14 年（1925）に屋根の大修繕をした、とある。



香雲閣



香雲閣の図（『香取名所図会』
 〈明治 31 年〉より）

◆^{さいてん}香取神宮齋田石碑

年代：大正 3 年（1914）

規模：高 2 m（角柱）

香取神宮の齋田入口脇の道路沿いに建つ石碑。正面に「香取神宮齋田」、向って左側面に「大正三年四月一日」右側面に「御即位記念 香取町有志者献納」などと刻まれている。大正天皇の即位を記念して、大正 3 年（1914）4 月 1 日に建立された石碑である。



齋田石碑

②式年神幸祭の順路に関係する建造物

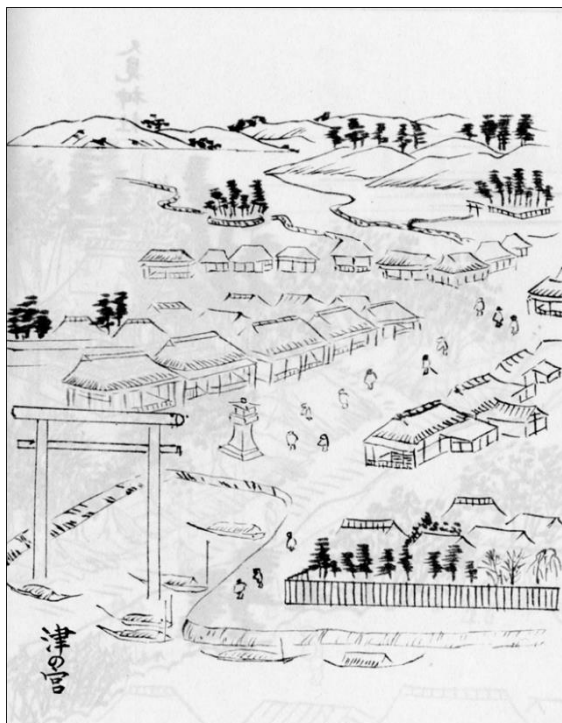
◆津宮河岸の常夜燈 <市指定文化財>

年代：明和6年（1769）

規模：特徴：石造の燈籠。地上高は280cmで、2段重ねの台座の上に、基礎・方柱の竿・中台・火袋（火を燈す部分）・笠・宝珠で構成されている。竿部の北面に「香取宮」、南面に「常夜燈」と大きく刻まれている。

明和6年（1769）3月、下総国猿島郡辺田村ほか近隣村々の36人により奉納されたもので、利根川筋最古の常夜燈である。津宮河岸は、香取神宮の表参道入口であり、利根川に面して大鳥居が建てられていることから、鳥居河岸とも呼ばれている。この地に建つ常夜燈は、江戸時代利根川水運が栄えた頃、往来する船の目印として大きな役割を果たしてきた。

なお、明治33年（1900）から昭和5年（1930）に行われた利根川改修工事による築堤で、常夜燈は堤防の内側（陸地側）に移されている。



津宮河岸の図（『下総名勝図絵』弘化3年〈1846〉より）



津宮河岸の常夜燈



かつての津宮河岸（大正期）

◆^{おし お}忍男神社（^{ひがし みや}東ノ宮）

年代：慶長 12 年（1607）

規模・特徴：流造、銅板葺、2 坪。

◆^{まもり お}膽男神社（^{にし みや}西ノ宮）

年代：慶長 12 年（1607）

規模・特徴：流造、銅板葺、2 坪。

忍男神社（祭神は伊弉諾命^{いざなぎのみこと}）・膽男神社（祭神は^{おおなむちのみこと}大己貴命）の両社は、香取神宮の摂社で、浜手守護の神と言われる。香取神宮の表参道入口である津宮の地で、北面して一対となり鎮座している。

慶長 12 年（1607）に徳川幕府により造営され、元禄 13 年（1700）の香取神宮社殿造営と同時に両社の修理が行われた。その後、幾度かの修理を経て、昭和 56 年（1981）に地元区民により両社の大修理が行われた。

東西の両社の境内には、それぞれ 1 基ずつ、文政 11 年（1828）銘の石灯籠が奉納されている。いずれも、^{さおいし}竿石に「御神燈」「文政十一年戊子三月吉日」との刻銘があり、一対となって両社に奉納されたものである。

忍男神社では、かつては香取神宮の白状祭がここで執り行われていた。摂社の側高神社の神が、香取の神に命じられて、奥州から馬を連れ帰ってこの地に放した、との故事に^{ちな}因んだものであった。



忍男神社（東ノ宮）



膽男神社（西ノ宮）



御神燈（左・忍男神社、右・膽男神社）



忍男神社（明治末期）



膽男神社（明治末期）

(4) 香取神宮で行われる年中祭典

1) 香取神宮の主な年中祭事・神事

神事祭礼は建永2年(1207)の古文書に「年中九十余度之神事」(「旧大禰宜家文書」『千葉縣史料 中世篇 香取文書』所収)とあるように、大中小様々な神事祭礼が執り行われていた。

明治初期の神社制度の改正以後は、政府から神社祭式が發布され官祭が執行されるようになり、その他の祭典は私祭として、旧儀によって新式に編成して行われた。官祭は例祭(4月14日)、祈年祭(2月17日)、新嘗祭(11月23日)を三大祭とし、地方長官が奉幣使として参列した。また、神幸軍神祭(4月15日)、大饗祭(11月30日)を二大祭とした(『新修香取神宮小史』)。

現在は、御田植祭や神幸祭など6件の大祭や元始祭や大饗祭など10件の中祭など、別表(香取神宮の年中祭典)のとおり各種祭礼が年間を通して執行されている。

月	日	区分	祭典名	時間	備考
1月	1	中祭	歳旦祭並御日供始祭	午前5時	
	3	中祭	元始祭	午前10時	
	4		末社 聖神社例祭	午前10時	
			政治始祭	午後3時30分	日時変更あり
	7		昭和天皇祭遙拝式	午前10時	
			交通安全祈願祭	午前10時30分	日時変更あり
	8		末社 大山祇神社例祭	午前9時	
			成人の日祭	午前9時	第二月曜日
	9		醸造安全祈願祭	午前10時	日時変更あり
	11		町村自治祈願祭	午前10時	日時変更あり
	12		末社 狐座山神社例祭	午前11時	
	14		月次祭並献詠祭被講式	午前10時30分	
	16		星鎮祭	午前10時	
2月	3		節分祭	午後1時30分	
	4		末社 押手神社例祭	午前10時	
	11	中祭	紀元祭	午前10時	
	17	大祭	祈年祭	午前10時30分	
	18		末社 姥山神社例祭	午前11時	20日前後の日曜日
	20		摂社 又見神社春祭	午前11時	
	23		末社 佐山神社例祭	午前10時30分	
3月	10		摂社 奥宮例祭	午前11時	
	17		香取護国神社春季大祭	午前11時	彼岸の入り
	21		春季皇霊祭遙拝式・春分の日祭	午前10時	春分の日
4月	3		神武天皇祭遙拝式	午前10時	
	7	大祭	農業振興祈願祭	午前11時	
			御田植祭耕田式	午後1時	第一土曜日
	8	大祭	崇敬会大祭	午前11時	
			御田植祭田植式	午後1時	第一土曜日翌日曜日
	11		山口祭	午前10時	
	12		末社 諏訪神社例祭	午前10時	
	14	大祭	例祭	午前10時	
	15	大祭	神幸祭	午後1時	
	29	中祭	昭和祭	午前10時	
5月	1		朔日祭・みどりの日祭	午前10時	
	5		健児祭	午前10時	
6月	30		大祓式	午後3時	
7月	1		朔日祭並御日供講祈願祭	午前11時	
8月	1		末社 馬場殿神社例祭	午前9時	
	16		末社 市神社例祭	午前10時	
9月	11		末社 王子神社・六所神社例祭	午前10時	
	17		敬老の日祭	午前10時	
	23		秋季皇霊祭遙拝式	午前10時	秋分の日
			秋分の日祭	午前10時	
	26		香取護国神社秋季大祭	午前11時	彼岸の明け
10月	8		体育の日祭	午前10時	第二月曜日
	17	中祭	神嘗祭当日祭遙拝式・新飯神事祭	午前10時	
11月	3	中祭	明治祭	午前10時	
	4		末社 櫻大刀自神社例祭	午前10時	
	9		摂社 鹿島新宮例祭	午前10時	
	10		摂社 匠達神社例祭	午前10時	
	14		月次祭並奉納菊花奉告祭	午前10時	
	23	大祭	新嘗祭	午前10時30分	
	24		新穀感謝祭	午前11時	
	30	中祭	大饗祭	午後6時	
12月	1	中祭	賀詞祭	午後6時	
	4	中祭	内陣神楽	午後5時	
	7	中祭	団基祭	午後6時	
	18		摂社 又見神社例祭	午前11時	
			末社 三島神社例祭	午前11時	
	23	中祭	天長祭	午前11時	
			大祓式	午後3時	
	31		除夜祭	午後5時	
			神符守札還霊祭	午後5時30分	
			古神札焼納祭	午後5時30分	
【月間恒例祭】					
	日	区分	祭典名	時間	備考
	1		朔日祭	午前10時(9月は時間変更あり)	1月、12月は除く
	14		月次祭並献詠祭	午前10時	1月、4月、11月は除く
	21		摂末社月次祭	午前10時	

香取神宮の年中祭典(平成30年)

●御田植祭（4月第1土曜・翌日曜日）

神田耕作の行事で、明德2年（1391）の祭帳にも記載されている祭事。日本三大御田植祭と言われ、住吉大社（大阪市）・伊雑宮（志摩市）と共に広く親しまれている。耕田式（4月第一土曜日）、田植式（翌日曜日）の二日間にかけて行われる。

1日目・耕田式 午後1時～

午後1時に神徳館表門前から、耕田所役（稚児、苗長、田舞舞女、苗代主、早乙女手代）が入場し、香取神宮拝殿前で祭典が行われる。

祭典後、拝殿前で耕田式が行われる。耕田風景を模した行事である。8人の稚児たちの周囲をナソリ、オオベシミ、ウバと呼ばれる面をかぶった祓い役が廻り、お祓いをする。その後、所役により四隅に鋤入される。境内には8本の大華傘が彩りを添えている。

次いで耕田行事が行われる。舞女による田舞や早乙女手代による植初め行事が奏される。その後、各々玉串を奉奠して終了する。



舞女による田舞



早乙女手代による植初め行事

2日目・田植式 午後1時～

2日目は田植式で、拝殿前での行事ののち、祭員を始め稚児・早乙女手代等の行列が斎田へと向かう。参進順路は拝殿前―楼門―総門―表参道―斎田（帰路は逆路）である。稚児は幼い女兒であるためか、参進の際、父親の肩車にて進むのが通例である。また、稚児にはそれぞれ大華傘が従うが、大神田・司田・犬丸田・金丸田・利助田・駒田・長田・狭田の8つの田の名前が記されている。ただし、これらの田の名前が、現在のどの場所に相当するかはわかっていない。

斎田の入口には大正3年（1914）建立の斎田石



斎田の入口

碑が立っているが、行列はここを曲がった先にある斎田へと進む。斎田に着くと、あらためて祭典が行われ、その後、早乙女手代と苗代主による御田植えが行われる。早乙女手代が横一列に並び、田植え歌を唄いながら苗を植える様は、昔からの稲作風景を今に伝えるものである。最後に宮司が虫除札を苗代主に授け、これを田に立てて田植式は終わりとなる。

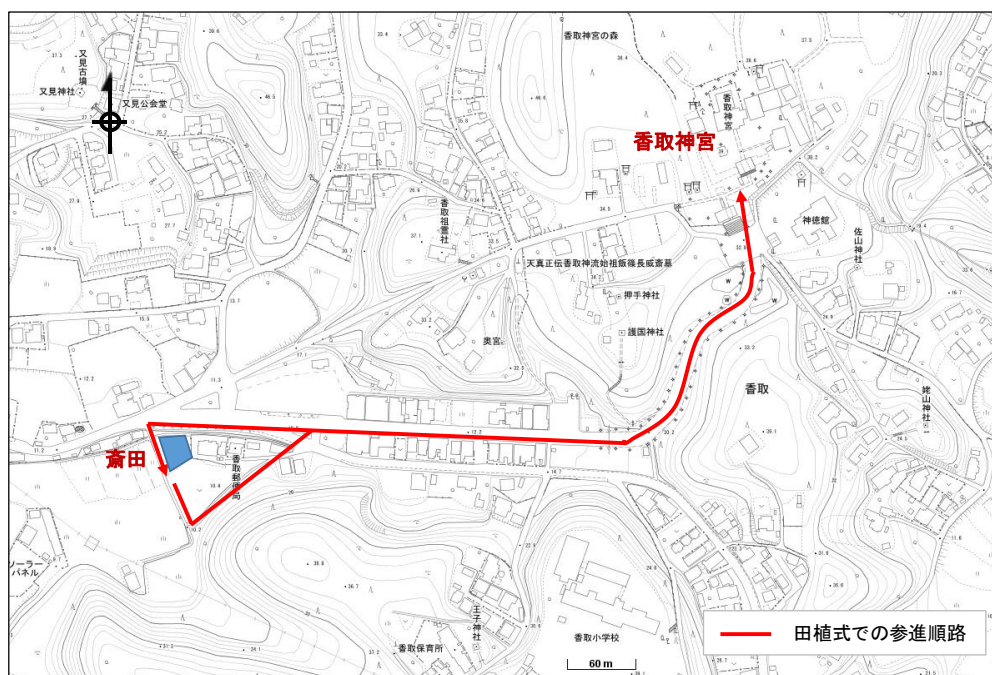
その後、行列は斎田入口とは反対側の小道を迂回するように進み、参道へ出て、そのまま来た道を拝殿前へと戻る。



稚児の参進



早乙女手代による御田植え



田植式での参進順路

●例祭（4月14日）・神幸祭（4月15日）

例祭 4月14日 午後1時～

神幸祭の前日に、香取神宮の年間祭典の中で、最も重要な祭である例祭が行

われる。皇室の弥栄と国家の安泰、氏子・崇敬者を始め、国民の繁栄をお祈りする祭礼である。香取神宮は、勅祭社の一つであり、6年に一度（子年、午年）、勅使（天皇などの使者、現在は皇室の掌典が遣わされる）の参向がある。

神幸祭 4月15日 午後1時～

例祭の翌日には、神幸祭が賑やかに執り行われる。香取神宮の古くからの氏子地域の人々約200名が、平安時代さながらの装束に身を包み、御神輿を中心にして、列をなして参道を進む。

行列は、まず拝殿前を出発し、楼門、総門をくぐり、その後、緩やかな坂道となった参道を下っていく。その参進にあたっては、御座船引船隊である、おらんだ楽隊（千葉県指定無形民俗文化財）の演奏が響き、行列を大いに盛り上げる。

参道入り口にあたる大駐車場まで進んだのち、奉安された神輿の前で、宮司などによる御駐輦祭が厳かに斎行される。



神輿



行列に供奉するおらんだ楽隊



駐輦祭



下小野神楽（参道大駐車場）

御駐輦祭が済むと、その場で神楽の奉納が行われる。この神楽の奉納は、大崎の神楽、新市場の神楽、下小野神楽（いずれも市指定無形民俗文化財）で毎年のが当番が決められている。平成30年（2018）は下小野神楽が奉納された。なお、当番以外の大崎神楽、新市場神楽は、神幸祭が始まる前の境内や旧拝殿内にて、神楽を披



新市場神楽（楼門前）

露した。また、香取神宮にゆかりのある香取神道流（千葉県指定無形文化財）の奉納演舞も奉納された。

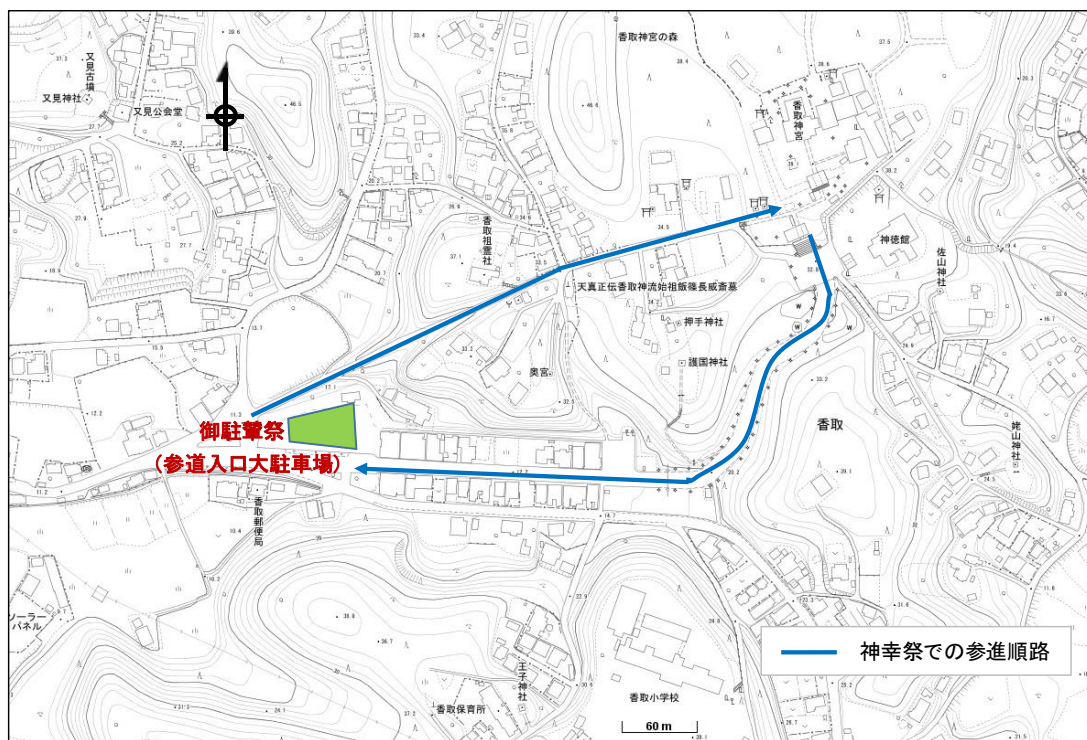
なお、12 年に一度、午年に行われる式年神幸祭では、二日間をかけて、香取神宮から佐原まで神幸行列を組み、一大絵巻を繰り広げる。



香取神道流の剣舞（旧拝殿）



大崎大和神楽 (旧拝殿)



神幸祭での順路

●^{たいきょうさい}大饗祭 (11 月 30 日)

^ふ経津主神、^{たけみかづちのかみ}武甕槌神と共に、国土平定に従った神々を慰労する祭事である。巻行器(まきはかい)という^{まこも}真薦で編んだ器に蒸米を盛ったものや、鴨が羽を広げた様を模した鴨の^{はもり}羽盛・鮭の身を高く盛りつけた鮭の鳥羽盛など、他の神社でも普段見ることのない^{しんせん}神饌が多く、これらが 10 人以上の人の手を伝わって、神饌所から社殿に運ばれる。

祭典は、夕刻（午後 6 時頃）より拝殿前で斎行される。夜の闇の中で^{かがりび}篝火をたき、荘厳な雰囲気の中で、祭儀のほか、大和舞の奉納などが行われる。



祭儀



神前での大和舞



大饗祭の神饌



神饌・巻行器の蒸米



神饌・鴨の羽盛



神饌・鮭の鳥羽盛

2) 12年に一度の香取神宮式年神幸祭

①はじめに

香取神宮では、例年4月14日に例祭、15日に神幸祭が行われているが、式年神幸祭は、12年に一度、午年に斎行される最も盛大な祭礼である。神幸行列は、二日間にわたり、香取から佐原の各所を進む。平成26年には4月14日の勅祭を含め、16日までの三日間行われた。

かつては旧暦3月に行われていた。元は式年遷宮大祭しきねんせんぐうの名で、遷宮に伴い20年に一度行われてきたとも言われ、中世以降は途絶えていた。明治8年(1875)4月に神幸軍神祭じんこうぐんしんさいとして再興され、同15年(1882)からは12年に一度行われるようになった。



津宮河岸 御座船



佐原の町並みを進む行列

②香取神宮式年神幸祭の由来等

『新修香取神宮小史』（香取神宮発行、旧刊は明治25年〈1892〉発行）では「元は式年遷宮大祭の名で行われてきたと思われ、20年に一度と定められていた。然るに戦国時代以降うち続く戦乱によって、式年遷宮が行われなくなり、替わって十二年に一度ずつ神幸祭を行うことになって、今日に至った」とその由来を推定している。



神幸軍陣祭（大正7年〈1918〉）

また、午年に行う理由として、1年は12か月、十二支で繰り返し、元（始）に還る、午は方角では南、時刻では正午、太陽が一番昇り切り、動物の馬も古来陽の気のもので、その強い力により、邪気を祓い清めることが出来るとされるため、としている。

式年神幸祭の最大の見せ場は、津宮から利根川（近世以前は香取内海）に御座船が水上行幸することにある。中世には「御船遊」とも呼ばれ、旧暦の三月に行われたため「三月神事」「三月御幸」などとも記録されている。例えば、至徳3年（1386）6月に書写された香取社年中神事目録には「□（三）月一日御神事」（田所家文書18号『千葉県歴史資料編 中世2』）とある。しかし、天和元年（1681）12月2日の香取社祭礼帳写（田所家文書83号）には、三月神事のこととは記載されておらず、ほぼ同時期の香取社祭礼帳写（田所家文書84号）では、「三月幸御（ママ）御神事」は「今ハ神事無之」とあつて、行われなくなっていたようである。

明治8年（1875）4月に年中行事として再興され、明治12年（1879）とつづき、明治15年（1882）午年以降は12年に一度行われるようになった。戦前までは「神幸軍神祭」とも称していた。



神幸軍陣祭・旧参道（大正7年〈1918〉）



神幸軍陣祭・楼門前（大正7年〈1918〉）

③式年神幸祭の流れ

最近では、平成26年（2014）4月に式年神幸祭が行われている。まず、4月11日には神幸祭の御舟木採取に関する祭典である山口祭が執り行われた。そして4月14日には、勅使である北島掌典の参向による勅祭が斎行され、式年神幸祭を迎えた。その行程は別図のとおりである。



鹿島神宮御迎祭

4月15日（1日目）

香取神宮を出発した行列は、まず津宮河岸に向かい、浜手守護の神とされる忍男神社・^{まもりお}膽男神社の両社を過ぎ、常夜燈が建つ浜鳥居まで進む。御駐輦祭のあと、神輿を御座船に移し、ここから利根川を佐原方面へ遡上する。水上では、^{うしがはな}牛ケ鼻での鹿島神宮御迎祭などの祭典等のあと、佐原付近で上陸し、まず佐原新宿地区を巡幸し、御旅所で一日目が終わる。



佐原の小野川沿いを進む行列

4月16日（2日目）

二日目に御旅所を発した行列は、佐原新宿の鎮守・諏訪神社に向かい、その後、佐原新宿から佐原本宿へと移り、佐原本宿の鎮守・八坂神社、そして篠原地区の八坂神社を巡幸して、それぞれ御迎祭を執り行い、香取神宮へ御還幸となる。行列には多くの氏子地区が参加し、また沿道は12年に一度の大行列を見るために多くの見物客で賑わう。



御旅所での駐輦祭

なお、平成26年度式年神幸祭では、本殿屋根の葺き替えが行われたため、平成24年10月23日に仮殿遷座祭、平成25年11月8日に勅使奉仕による本殿遷座祭も執行されている。

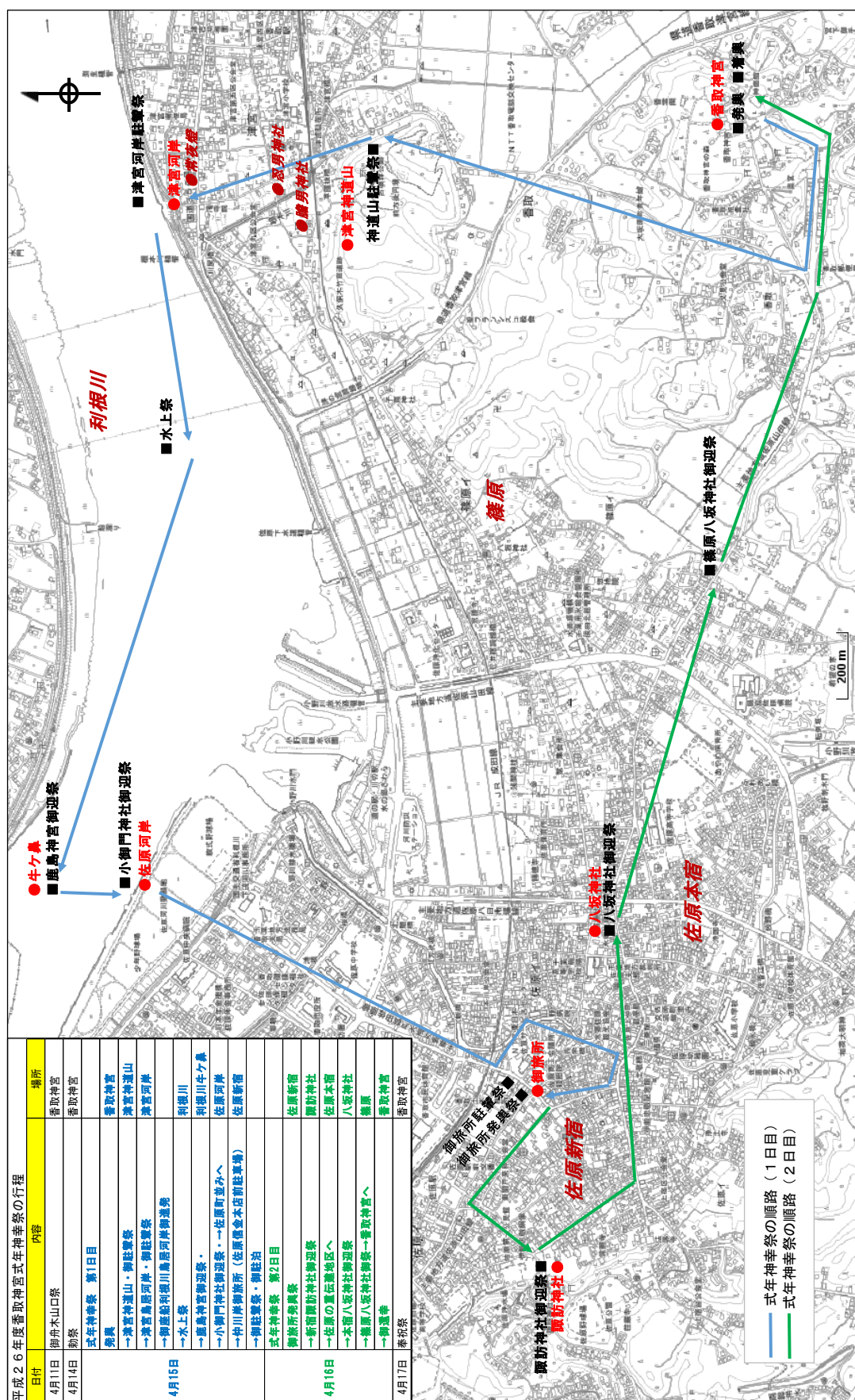


諏訪神社前 多田の獅子舞



御還幸

平成26年度香取神宮式年神幸祭の行程		
日付	内容	場所
4月11日	御舟木山口祭	香取神宮
4月14日	勅祭	香取神宮
4月15日	式年神幸祭 第1日目	
	夷異	香取神宮
	→浅宮神道山・御柱簀簀	浅宮神道山
	→浅宮鳥居河原木・御柱簀簀	浅宮河原
	→御船越利根川鳥居河原御連祭	
	→水上祭	利根川
	→鹿島神宮御連祭・	利根川中ノ島
	→小御門神社御連祭(→佐原宮さみへ	佐原河原
	→仲川麻績所附(佐原(原金本宮前社真境)	佐原新宮
	→御柱簀簀・御柱泊	
4月16日	式年神幸祭 第2日目	
	御旅所夷異祭	佐原新宮
	→新厩勝防社御連祭	勝防神社
	→佐原の重徳地区へ	佐原本郷
	→本宿八坂神社御連祭	八坂神社
	→御船八坂神社御祭(→香取神宮へ	御船
	→御連祭	香取神宮
4月17日	奉祝祭	香取神宮



式年神幸祭の順路

④行列に供奉する地区・団体

香取神宮式年神幸祭では、香取神宮周辺の各地区の氏子などが行列に供奉する。その範囲は、佐原地区や小見川地区の広範囲に及んでいる。

式年神幸祭では、氏子行列に加えて、県・市の文化財指定を受けている地区の神楽なども供奉している。

おらんだ楽隊（扇島地区・県指定）、返田の獅子舞（返田地区）、多田の獅子舞（多田地区・市指定）、下小野神楽（下小野地区・市指定）、香取神道流（香取地区・県指定）、大崎大和神楽（大崎地区・市指定）などである。

地区	構成区・団体
津宮	津宮一区～十一区
佐原	本宿、新宿、篠原本田、篠原新田、砂場、向津
豊浦	富田、増田、一ノ分目、一ノ分目新田、下小堀
小見川	上小堀、新福寺、三ノ分目、九美上一区～四区
神里	新部、織幡、釜塚、香取
新島	扇島、附洲新田
香取	返田、新市場、吉原、多田
香取・神里	丁子、丁子新田、油田、多田山田
香西	下小野、香取神道流剣士隊、大根、大崎

※赤文字は神楽等でも参加した区・団体

式年神幸祭 行列供奉地区・団体



おらんだ楽隊



返田の獅子舞



多田の獅子舞



下小野神楽



大崎大和神楽



香取神道流

⑤社殿・境内地の整備等

香取神宮では、式年神幸祭を迎えるにあたって社殿や境内地の整備等がたびたび行われてきており、古くは官費をもって賄われてきた。現在は、式年神幸祭にあたって奉賛会が組織され、式年神幸祭の斎行とともに、社殿の修理、整備事業も併せて実施されている。その費用については、式年神幸祭を斎行するために関係者、氏子などからの多額の奉賛金によって賄われている。このうち、文化財建造物については、修繕等が必要と判断された場合には、一部補助金等も活用している。

香取神宮では現職の神職、職員のほかに、周辺の旧神職家などで組織される祀祐社^{しゆうしゃ}も祭典等に従事している。また氏子による崇敬会も組織され各種行事に参加、協力する体制となっている。奉賛会は、式年神幸祭を円滑に運営するために特別に組織されるもので、民間諸団体を始めとして、議会や行政関係者などがこれに参加している。

また、行列の供奉についても、参加各地区の奉仕と一部費用負担により賄われているが、12年に一度の行事でもあり、各地区は積極的に参加している。

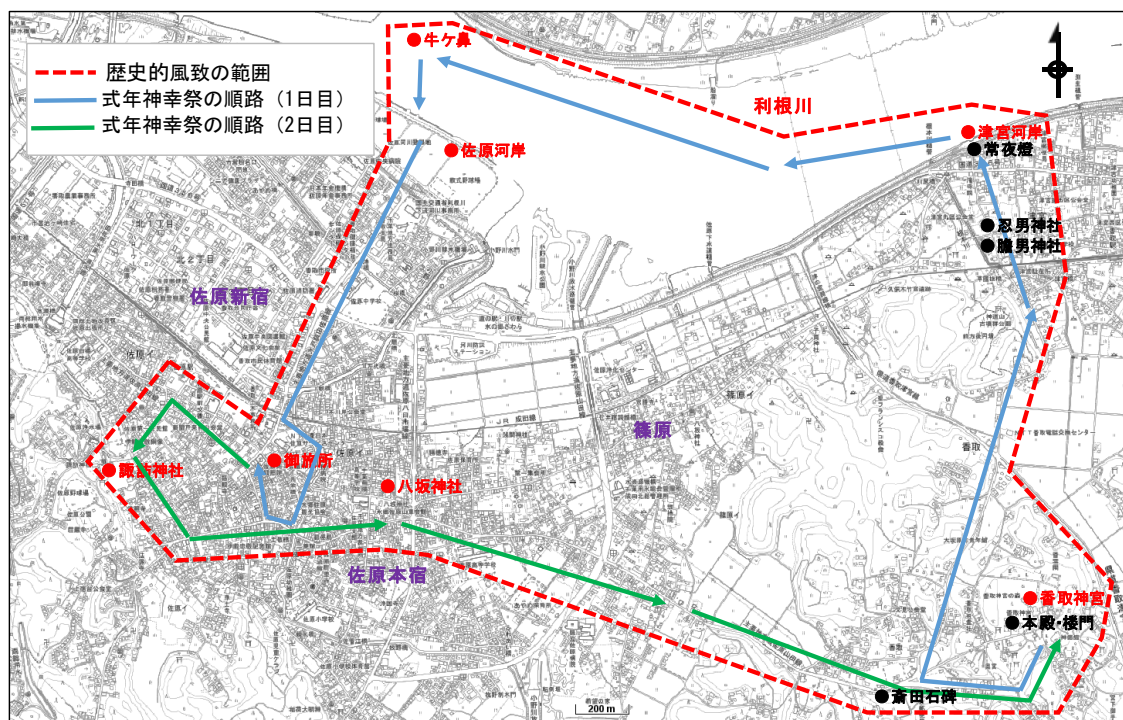
年代	西暦	整備の主な内容
昭和17年	1942	拝殿を移設し、新拝殿を建築、楼門の廻廊を取り壊し、新築、総門、手水舎を新築
昭和29年	1954	本殿、幣殿、拝殿を柿葺きから檜皮葺きに改める
昭和41年	1966	楼門、神饌殿、手水舎、総門の銅板葺直し、宝物館、神符授与所、祈祷者控室等を新築
昭和53年	1978	災害復旧工事として屋根修理・葺直し
平成2年	1990	楼門廻廊の延伸
平成14年	2002	本殿・拝殿ほか塗彩色直し、社務所建替え、津宮浜鳥居建替え
平成26年	2014	拝殿・幣殿・本殿の屋根檜皮葺直し、拝殿塗彩色塗り直し、表参道朱鳥居修繕等

式年神幸祭にともなう社殿等の修理・整備

(5) まとめ

香取神宮で12年に一度、午年に斎行される式年神幸祭は、年中祭典で行われる神幸祭の延長線上にあるものであるが、式年祭であることからその神幸行列の範囲は拡大し、香取神宮周辺のみならず、西方に4 kmほど離れた佐原市街地（本宿地区、新宿地区）まで及び、参加氏子も大規模なものとなっている。

中世鎌倉時代には、式年遷宮大祭としてすでに始まっていたとされる神幸祭は、少なくとも江戸時代に一時中断していたものの、明治 8 年（1875）に改めて復活し今日に及んでいる。香取神宮を象徴する伝統的な祭礼である。香取神宮の式年神幸祭は、行列の範囲である香取神宮周辺や佐原の町並みのみならず広く氏子圏内に影響を及ぼし、その歴史的風致を形成している。



香取神宮信仰と式年神幸祭に見る歴史的風致の範囲

コラム3 絵図・絵巻に描かれた香取神宮の本殿（正神殿）

香取神宮で最後に遷宮・造替が行われた元禄13年（1700）に、境内の建物などの様子を描いた古絵図に、「香取神宮境内古絵図」（市指定文化財「大禰宜家所蔵資料」）がある。この古絵図は、それまであった境内絵図を写したものであるが、そこに描かれた正神殿（本殿）は、元禄13年（1700）に建替えられた現在の本殿に近いものである。しかし、ここに描かれた正神殿は、これ以前に権検非違使家本「香取神宮神幸祭絵巻」〔永正13年（1516）奥書〕に描かれた正神殿は、その建物規模が異なっている。



「香取神宮神幸祭絵巻」
（権検非違使家本）



「香取神宮境内古絵図」

元禄13年（1700）の「香取神宮境内古絵図」の正神殿は、正面の御扉が1間、桁行3間、梁間3間の建物として描かれている。また、背面には庇と考えられる表現がある。現在の本殿と近い建物規模となっている。しかし、これより以前の権検非違使家本「香取神宮神幸祭絵巻」〔永正13年（1516）奥書〕の正神殿は、正面御扉2間の桁行五間（正面御扉は2間で中央に1間が加わる）、梁間3間の規模で、柱頭には龍頭の表現がある。権検非違使家本「香取神宮神幸祭絵巻」は、その跋文から建仁2年（1202）当時の神幸祭の様子を描いたものとされることから、鎌倉時代の正神殿は現在のものよりも大規模であったと推察される。

式年遷宮・造替の際は、「あさめ殿」と称する仮殿を建て、まずこの建物に神体を遷して、もとの正神殿を壊し、新造に着手する例であった。「あさめ殿」は正面3間、側面2間の母屋と背面1間通りの庇とから成り、この後方の庇部分に神座を設けることは古来よりの伝統を保持したものである。このように、正神殿の規模は、遷宮・造替をくり返すうちに、「あさめ殿」の規模へと移行していったのではと考えられる。

◆「香取神宮境内古絵図」(大禰宜家所蔵資料・市指定文化財)

(絹本、彩色、軸装、縦 238.4 cm、横 173.5 cm)



「香取神宮境内古絵図」(一部加筆)

コラム4 絵巻に描かれた香取神宮神幸祭

現在の式年神幸祭は、明治8年（1875）4月に神幸軍神祭として再興されたものであるが、その原型は中世期の神事である神幸祭に求めることができる。かつては旧暦3月に行われ、式年遷宮大祭の名で、遷宮に伴い20年に一度行われてきたとも言われ、中世後半以降は途絶えていた。

中世の香取神宮神幸祭の様子を描いた史料として、香取神宮神幸祭絵巻がある。現在、この絵巻は①権検非違使家本、②多田家本、③日本民芸館本、④大禰宜家本、⑤國學院大學本、⑥成田山仏教図書館本、の諸本が確認されており、また原本は焼失しているが⑦水戸彰考館本（写真帳）が残る。

これらの絵巻は、香取神宮を発した神輿の行列が、北にある津宮へと向かい、三つの御船木を水辺（現利根川）に納めるまでの様子が描かれていて、供奉する多くの神官のほかに、正神殿、神宮寺、津宮の大鳥居などの関連する建造物も見ることができる。これら7つの絵巻は、基本的に描かれた内容や構図は共通しているが、写し描かれた時代や、書き手などにより、人物の装束や配色、建物構造などが微妙に異なっている。

このうち、最も古例を描いたものとされる権検非違使家本の永正13年（1516）の奥書によれば、この絵巻は、建仁2年（1202）の記録をもとに至徳3年（1386）に写し改められ、さらに虫喰いにより破損したため永正13年（1516）に写したものであること、また、神幸祭は、永徳年間（1381～84）までこの絵巻のように廃れずに行われていたことがわかる。鈴木哲雄氏の研究（『香取文書と中世の東国』）では、文永8年（1271）遷宮の「香取社造営注文」（香取神宮古文書）にある記載内容と整合するため、権検非違使家本の内容が鎌倉期の神幸祭の姿を留ると指摘している。

なお、大禰宜家本「香取神宮神幸祭絵巻」は、平成28年（2016）に「大禰宜家所蔵資料」として市の指定文化財となっている。正神殿や神輿の描かれ方などから、権検非違使家本の示すところよりも、やや時代が下ったものと推定されるものであるが、彩色もよく残り、人物等の表現も丁寧である。

この香取神宮神幸祭絵巻は、大禰宜や大神主（大宮司）など香取神宮の神官により厳かに行われた古来の神幸祭の様子をうかがい知ることのできる貴重な資料である。

◆大禰宜家本「香取神宮神幸祭絵巻」(大禰宜家所蔵資料・市指定文化財)

(卷子1巻、縦27.5cm、全長1,292cm、彩色)

(第1紙)



大楯 二御船木 八龍神 一御船木 忍男 三鳥居 膳男 津宮

(第2紙)



鐘楼 検非違使 酒司 押領使 田冷 四御神馬 三御神馬 二御神馬 一御神馬 三御船木

(第3紙)



八人儉杖 二鳥居 宮介 国司代 楼門二(仁)王堂 塔 神宮寺

(第5紙)



物申祝 大祝 副祝

(第4紙)



(第6紙)



獅子 八乙女 物忌 内院八人

(第7紙)



引馬 大神主 御神輿 歌人 八乙女

(第8紙)



大禰宜随兵 同随兵 権禰宜

(第9紙)



大禰宜 国行司 同引馬

(第10紙)



一鳥居 神主 同引馬 神主随兵

(第11紙)



正神殿 御留守 楼門 廻廊